

第23回 ちゅうでん教育振興助成（2023年度）

小・中学校の部 報告書資料

学校名・団体名	愛川町立愛川中学校
コース	学校支援コース
活動・研究のテーマ	誰一人置き去りにしない教育の実現に向けた取り組み

〈活動・研究の意義および活動報告〉

活動報告にあたり、実施計画の「2. 活動内容」を振り返る。

2. 活動内容

(1) 対象者 愛川中学校生徒（199名）

(2) ねらい

① 登校支援(サポートルーム)

① 登校支援 教室（集団）に入ることに抵抗を抱えている生徒が、安心して学習を受けられ、その生徒に合わせた目標を設定することで、登校に対する不安を少しでも取り除くことを目的とする。

② 学習支援 登校支援の一環として、低学力が、不登校や生活態度、授業態度や様々な活動の意欲に影響していることも多く、発達の問題を抱えている場合もある。サポートルームに登校できた際に、学習の補習を行えるように整える。

② 学習支援(取り出し授業)

① 登校支援 学業不振を起因とした不登校生徒も多いと考えられるため、未然防止を目的とする。

② 学習支援 通常の学級での授業について行くことが難しい子どもたちを対象に、特定の教科（数学・英語）の少人数指導を行うことで、授業への不安感を減らす。

(3) 取り組み

① 登校支援(サポートルーム)

・ 対象生徒…基本的に、集団への不適応生徒を対象とする。学習支援を根幹とする不登校傾向の生徒も扱う。

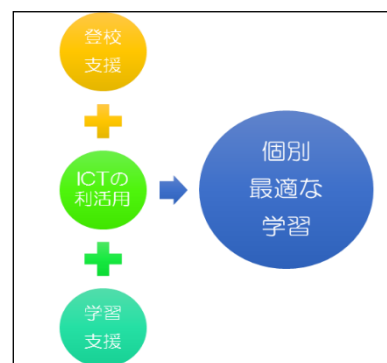
・ 内 容…学習支援や、コミュニケーションを学べる場として、学校で過ごせる場を提供する。生徒の状態に柔軟に対応し、例えば、一人一台渡されているクロームブックを活用し、教室で行われている授業の配信を見たり、本校で使うことのできるオンラインの学習ソフト等を活用したりする。また、本校で行われる授業プリントを必要に応じて使用する。

サポートルームへの登校をきっかけに教室復帰を目指す。

② 学習支援(取り出し授業)

・ 対象生徒…基本的に、学業不振生徒を対象とする。

・ 内 容…基礎の計算や、英単語・アルファベットなど、力が不足していて、授業に対して困り感がある生徒を対象として復習を中心とした学習を行う。一人一台のクロームブックを活用し、オンラインの学習ソフト等を活用する。



以上の活動を1年間実施してきた、次のページより、本年度の活動の報告をする。

①登校支援(サポートルーム)について

登校支援については、集団への不適応生徒を対象とした場の設定を行ったことで、昨年度ほとんど登校が継続できなかった生徒が、週に2～3日登校するようになったり、ほとんど大人とは話をしなかった生徒が、少しずつ心を開きコミュニケーションをとることができるようになったりと、成果をあげている。

この場(サポートルーム)の位置づけは、「コミュニケーションを学べる場」と「学校で安心して過ごせる居場所としての場」の二つがある。

「コミュニケーションを学べる場」として、生徒と教師という枠の中でのコミュニケーションをし、学校行事の準備(右の写真 FRIEND の文字の作成等)を教員と一緒にすることで、役に立っているという実感を持たせることができた。また、サポートルームに通室している生徒がいるときに、通常に登校できている生徒に来ていることを伝え、生徒同士のコミュニケーションをはかった。

「学校で安心して過ごせる居場所としての場」として、サポートルームに通室している生徒対象に調理実

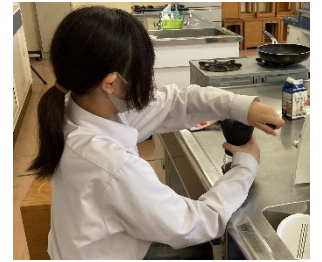
習を行ったり、長期休暇中に行った場所や、自分の得意なことに関して、クロームブックを使いまとめさせ、自分のことに関して開示する練習などを行ってきた。サポートルームへの継続的な登校だけでなく、サポートルームで少し、学習をしてみようという気持ちも出てきたようで、学習に取り組む機会も出てきている。



GWスペシャル! 私こんなところ行ってきました!
(1)shibetsu

醫子山上神社(とりのこさんじょうじんじゃ)

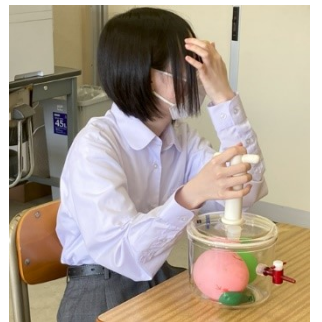
栃木県と茨城県の境界にある神社
大島田や本殿の中央を県境が貫き、二等分されている(珍しい)
社名の正式な読みは
栃木県側が「とりのこさんじょうじんじゃ」
茨城県側が「とりのこさんじょうじんじゃ」
本来は栃木県側と茨城県側「とりのこさんじょうじんじゃ」が正式な読みであったが、1946年(昭和21年)に免足した神社庁に登録手続きをする際に、茨城県側の富司が勝手に「とりのこさんじょうじんじゃ」と記入してしまっており、茨城県側が「とりのこさんじょうじんじゃ」として登録した。



②学習支援(取り出し授業)について

学力不振の生徒を対象として、英語などの取り出し授業を行った。教室で行っている授業だとしていけず、机に伏せてしまっていた生徒が取り出し授業では担当教員と今行っている単元の英単語を一緒に学習したり、ノートづくりやワークに取り組むなど前向きに学習に取り組むことができた。

また、今の単元だけでなく過去の振り返りが必要な生徒に対しても、小学生の教材を使用するなどして、少しずつ、力をつけていけている。



こういった活動を通して、支援を必要とする生徒に対する先生方の向き合い方が徐々に変わろうとしてきているように感じる。

昨年度までは、クラス担任や学年だけで、支援が必要な生徒へのフォローを行ってきたが、学校として支援が必要な生徒に対してのフォローできる環境が整ったことで、支援が必要な生徒に対してどういった手立てを行えるかの幅ができ、担任の先生や学年コーディネーターのよりどころにもなれているように感じる。来年度に向けた学校評価の職員アンケートにも批判はなくスムーズに受け入れられてるように感じる。

愛川中学校の取り組みを厚木愛甲地区の生徒支援の担当者会議の場で簡単ではあるが、発表する機会をいただき他校の取り組み等聞くこともできた。今年度の取り組みをよりよくしていくための機会となった。

課題として、支援が必要な生徒に対する支援の目標を具体的にしていく必要性を感じている。

今までは、クラス担任や学年での対応を行ってきたことで、ある程度の生徒の支援の方法や目標の共有できていたが、学校体制として支援をしていくとなると、具体的に何を目指していくのか共有していく必要があると感じている。

来年度に向けて、目標の共有の仕方や目標の立て方など研究を続けていきたい。

③愛川中の取り組み&生担としての取り組み<

(他の話題提供2)<

今年度の愛川中学校で本多が取り組んでいる事.<

①サポートルームの運営が本格的にスタートしました.<

愛川中学校では、やはり長欠が大きな課題です。そこで、今年度からサポートルームを午前4時間開設できるようにしました.<

先生と学習サポーター方の持ち時間を検討し、日に4時間週20時間時間割に確保しました.< 少しずつ、軌道に乗ってきた印象です。もっとこんな方法あるよ! などアドバイスがあったら嬉しいですよ.<